

吉井源太と明治

《1》

維新で人生折り返す

「土佐紙業の恩人」没後100年 村上 弥生

吉井源太は、文政九（一八二八）年、吾川郡伊野村に生まれた。明治維新の約四十年前である。そして、明治四十一（一九〇八）年に没した。明治維新の時を人生のちょうど真ん中で通過したことになる。第十五代土佐藩主・山内容堂が生まれたのは、源太が満一歳の時だ。

源太は八十年余りの生涯を、伊野で過ごした。そして、土佐和紙のため、日本の和紙のために働いた。

今年（一九〇八）は吉井源太の没後百年にあたる。「紙業界の恩人」などとされるが、実際にどのようなことをした人か、現在はあまり知られていない。

昨年十二月二十日から一カ月間、いの町紙の博物館で「吉井源太 没後百年記

念展」が開かれた。アンケートを見ると、五十代以上の男性と四十代女性に「源太のことをよく知っていた」という回答が少しあったが、県内の方でも「まったく知らなかった」という回答が多い。

何人かは、自分の利益にこだわらずに紙のために働いた源太に感心したといった感想を書いておられた。このような源太の姿勢は今、あらためて見直してよいのではないだろうか。

源太が生まれた家は、山内一豊に七色紙という貴重な紙を献上した時から始まった「御用紙漉」という役目の家だった。伊野と成山のみならず、二十四軒が決める家、これらの家では徳川家や、土佐藩主へ献上する紙を漉くことが義務付けられ

た。しかし、明治維新後は、このような制度も廃止される。そして、西洋から洋紙が輸入されるようになった。早くも明治五（一八七二）年には国内で洋紙を製造する会社を作ることが計画された。それまでは、外国の紙といえば中国の紙のことであり、日本にはほとんど和紙しかなかったのだ。そこへ新しく洋紙が入ってくることになり、和紙にかかわる人たちの不安が広がってくる。このような状況にあったのが、源太の生きて、働いた時代だった。

源太の遺品は、昭和三十九（一九六四）年に吉井家からの町へ寄贈され、町の保護文化財に指定された。「史跡」「建造物」「民俗資料」があり、このうち民俗資料は、製紙用具類や、日記を含む遺墨類が指定されている。日記は、源太が明治十（一八七七）年あたりから、亡くなる二年前の明治三十九（一九〇六）年までつけていたものだ。遺墨類は、源太が出したり受け取ったりした手紙や、県へ提出した書類の下書きなどが含まれている。この中には直筆の履歴書もある。源太が自らの一生を振り返ったものだ。これらは、いの町紙の博物館に保管されている。

明治時代の和紙製造業の状況を明らかにする目的で、平成十六（二〇〇四）年ごろからこれらを拝見し、和紙製造技術の最先端だった本県の様子を研究させていた。資料から、和紙業についての様子、当時の社会や地域の出来事もわかる。

連載では、日記と履歴書を手がかりに、源太が仕事の集大成として出した「日本製紙論」という本を見直し、源太のなした仕事を振り返りたい。また、源太や和紙業界の人達の活動、多彩な人々との交流などについて紹介し、その意味や、源太の人柄などを見ていきたいと思う。

（京大大学院研修員、京都府在住）



吉井源太と「日本製紙論」（カラーシジュ）

た。しかし、明治維新後は、外国の紙といえは中国の紙のことであり、日本にはほとんど和紙しかなかったのだ。そこへ新しく洋紙が入ってくることになり、和紙にかかわる人たちの不安が広がってくる。このような状況にあったのが、源太の生きて、働いた時代だった。